

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 77

2017年10月

Special to the Newsletter

南北アメリカに渡った Kaki —形而下の栽培作物の文化史—

三田 千代子

物の伝来と言葉の伝播

モノの伝来は人類の歴史でもある。文化を異にする社会に新しいモノが伝わると、しばしばそのモノを示す言葉も一語に伝わる。特に形而下的な物はその物を表す言葉と共に伝わり、その社会に新しい習慣や文化が出現する。ただし、伝わった先に同種の物が存在した場合、その物を示す元々の言葉は、伝わった先の言語に置き換えられることがある。伝わった先にある元々の物にすでに住民が親しんでおり、同種の新たな物はもう一つの選択肢にすぎないからである。これら2形態の物の伝播の事例として、ブラジルと米国に導入された日本の柿を挙げてみたい。

ブラジルの “caqui”

日本の柿はブラジルに「物」と「言葉」が一緒に伝播した例である。ブラジルのポルトガル語の辞書には“caqui”という単語が収録されており、日本語の「カキ」を語源にする“kaki”という表記が1913年までは用いられていた。その後ブラジルのポルトガル語表記の“caqui”に変更されている⁽¹⁾。

サンパウロの朝市に行くと、富有柿に“Caqui Fuyu”と商品名が書かれた値札が付けられているのを目にする。柿の生産地で開催される「柿祭り」のポスターには“Festa de Caqui”と記されている。しかも今やブラジルは、中国、韓国、日本に次ぐ世界第4位の柿生産国(2013年)で、ドイツ、オランダ、英国、スペイン、カナダに輸出するまでになっている。柿という果樹と「カキ」という日本語の音は、ブラジルに定着しているのである。ブラジルの日本移民が柿栽培に関わった結果であるといえそうである。

日本移民がブラジルで柿の栽培を開始するのは1920年前後のことである。サンパウロのコーヒー農園の契約労働者(colôno)を脱して、大農園主が売りに出した分譲農地を購入あるいは借地して、自営農として自立しつつあった時期である。日本移民は自家消費用に柿の苗を日本から導入した。

柿は日本人にとり「生活樹」として家の庭先に植えられ、食べ物としてばかりでなく、木材

としても利用され、柿渋からは渋紙を作り雨傘や団扇などの生活用品に利用してきた。お正月の供え餅の飾りに用いられる干し柿は、時代によっては年貢として納められたこともあり、柿は日本人が長い間親しんできた栽培樹木である⁽²⁾。柿の木のある風景は日本を代表する里山の風景であり、日本移民にとっては懐かしい故郷の景色でもある。

日本移民が持ち込んだ甘柿（富有、次郎など）⁽³⁾の栽培が、ブラジルの消費市場で軌道に乗るようになったのは1950年以降のこととされている⁽⁴⁾。1913年にはkakiという言葉がポルトガル語の辞典に登場していたことを考えると、日本移民が柿を日本から導入する以前に、ブラジルでは「カキ」という言葉とともに柿の存在が知られていたことになる。

ブラジル固有の品種

ブラジル渋柿の一種である「ラマフォルテ (Rama Forte)」は1925年からサンパウロ州のモジダスクルーゼス (Mogi das Cruzes) で栽培されるようになり、当時の首都リオデジャネイロ (以下リオと記す) を主な消費市場として出荷された。「ラマフォルテ」種の名称は、最初に栽培を手掛けた人物の名から付けられたものである。ブラジルの柿として知られるもう一種でブラジル原産地の地名から名付けられた「タウバテ (Taubaté)」と呼ばれる渋柿がある。「ラマフォルテ」種以前に栽培が始まっていた。1919年に日本から入手したとされる苗「ミカド」にブラジルの品種「マイゼーナ (Maizena)」を台木に用いて栽培された品種で、1923年からリオの市場で販売されるようになった。この「タウバテの柿」と呼ばれるブラジル品種の栽培を成功させ、商品にしたのは、イタリア移民の2世である。その後日本移民最盛期にあたる1934年に、ブラジルの日本人がこのタウバテの苗木を、消費市場向けに栽培するために購入している。つまり、日本移民が日本人のみの農村共同体を形成し自営農としてサンパウロ州の奥地で生活を開始した20年代には、すでに当時首都であったリオに柿が商品として店頭に並んでいたことになる。

ブラジルへの伝播

日本移民が柿を導入する以前に、「柿」が食され「カキ」という言葉も知られていたのだとすると、この「柿」と「カキ」はどこからブラジルに伝わったのだろうか。

ブラジルの柿の歴史に言及したブラジルと日本の資料のほとんどは、1880年代あるいは1890年代にブラジルにニホンガキ4品種（渋柿）の種と苗がペレイラ・バレット (Pereira Barreto) によってフランスから導入されたと記している。19世紀末はブラジルが帝政から共和制に移行する時代で、ブラジルは、ヨーロッパ、特にフランスを範として近代社会を形成しようとしており、フランスとの交流は頻繁に行われていた。

フランスから柿を導入した「ペレイラ・バレット」を、苗の輸入業者としている資料と単に名前のみを言及しただけの資料とがある。ペレイラ・バレットが誰であったのかは判らない。ただし、サンパウロ州には「ペレイラ・バレット」の名を冠した市がある。そこはかつて日本移民が移住地を形成していたところで、1938年に市に昇格した時、医者であり、政治家であり、自然科学者であったペレイラ・バレット (Luís Pereira Barreto 1840-1923年) に敬意を表して彼の名が用いられた。このペレイラ・バレットは旧コーヒー地帯の大農園の子孫である。ブ

リュッセル医科大学に学び、帰国後は医者であると同時にサンパウロ（県/州）選出の議員となり、ブラジル最初の共和国憲法の制定に関わっている。生物学者でもあったペレイラ・バレットは、ブラジルの農業問題にも携わり、ブラジルを代表する清涼飲料の原料グアラナー（学名 *Paullinia cupana* Kunth）の実の研究の先駆者である。ヨーロッパで柿に関心をもったとしても不思議ではない人物である。

いずれかのペレイラ・バレットがフランスから導入した柿の品種の一つは「ギオンボウ（祇園坊）」という渋柿であったということは判っている。東アジア原産とされる日本の柿がフランス南部や地中海沿岸地帯に伝えられたのは 1780 年代末とされている。日本では『蘭学階梯』（1783 年）が出版され、『蘭日辞典』（1785 年）が編纂されるなど、蘭学の隆盛期である。当時、長崎出島のオランダ商館にツンベルグ（Carl Peter Thunberg 1743-1822 年）というスウェーデン人医師がおり（滞在 1775-1776 年）、分類学を修めた植物学者として日本の植物の調査をしている。スウェーデンに帰国後、ウプサラ大学で教鞭をとりながら、1776 年には『ツンベルグ日本紀行』（山田珠樹訳注、改定復刻版、雄松堂、1966 年）⁽⁵⁾ を、1784 年には『日本植物誌（*Flora Japonica*）』を出版している。柿の木に学名 *Diospyros Kaki* Thunberg を付けたのは、1780 年とされている⁽⁶⁾。こうした経緯を考えると、日本の柿のヨーロッパ伝播に大きな役割をツンベルグが果たしていると考えられる。もちろん、南蛮貿易時代にポルトガル人やスペイン人がヨーロッパに日本の柿を伝えていた可能性はあるが、具体的な経緯を記した文献はまだ公になっていない。今日、イタリア語で“caco”（cachi は複数形）、スペイン語で“caqui”と日本語の音そのまま用いられて柿が消費されていることから、日本の柿がこれらの諸国に伝わったと考えられる。現在イタリアは、柿の生産では世界第 8 位（2013 年）である。スペインでは、「ロッホ ブリジャンテ（*Rojo Brillante*）」のように、新たな品種を誕生させている。スペインやイタリアと同じ南欧のポルトガルでは、ブラジルとは異なり、*dióspiro* という学名の冒頭の *diospyros*（ラテン語で「神の食べ物」の意）を用いている。ブラジルにはイタリア、ポルトガル、スペイン、といった南欧からの移民が多数渡っている。ブラジル各地には野生種の柿が見られることから、イタリア移民がナスやキュウリをブラジルにもたらしたのと同様に、南欧移民がそれぞれの地で新たに誕生した「カキ」を携えたのである。

つまり、日本の柿はヨーロッパを経てブラジルに渡り、ブラジルで日本移民が日本から携えた日本の柿と出会ったことになる。渋柿を消費してきたブラジルに甘柿をもたらしたのが日本移民であった。日本移民はブラジルの「カキ」栽培の品種を豊かにしたのは確かである。今日、南部のリオグランデドスル州から北東部のバイア州までの 7 州で市場向けの柿の栽培がなされており、主に 10 種の柿の品種が市場に出荷されている。このうち、甘柿は 3 種のみである。

渋柿と甘柿が並ぶ現在、ブラジルで柿を生食する場合、代表的な食仕方がそれぞれある。渋柿の場合は蒂（あるいは萼とも）の部分を取り取って、スプーンで掬い取って食すか、丸ごと凍結してシャーベットとして食する方法がある。甘柿の場合は、ナイフで適当な大きさに切り分け、皮を剥いて食すか、他の生野菜とともにサラダにしたりする。

1970 年代初めでもサンパウロの朝市には、完熟して果肉の柔らかくなった柿をプラスチックの容器を持参して購入するブラジル人の姿があった。当時の日系二世の説明によれば、果実

が崩れてしまうかのように熟した柿は適当な大きさに切って、「シューパ」(chupa)して食べるか、パンに塗ったりして食べるということであった。「chupaして食べる」という表現をしたのは、すするようにして食べるということであろう。この当時のサンパウロ市内のブラジル人にとって、柿とは完熟して柔らかくなったものであり、現在市場に出ている硬い富有柿とは異なっていた⁽⁷⁾。今日、市場に出回っているカキの品種を考えると、ブラジルの市場における渋柿の優位性は大きく変わっていないようである。

米国のカキ

南欧やブラジルといったロマンス語諸国では、柿の木の学名 *Diospyros Kaki Thunberg* に記されている“kaki”が柿に用いられてきた。フランスより以北に位置する英国、ドイツ、オランダなどのゲルマン語系の国々では、“persimmon”、あるいはこの単語を語源とした言葉が柿を意味してきた。これらの国々では日本やブラジル産の柿を輸入して消費しているが、その用いる言葉は“kaki”とは全く異なっている。

“Persimmon”は、米国のアメリカガキ(バージニアガキとも呼ばれる。学名 *Persimmon Virginian L.* 命名 1753 年)が英国に 1629 年に持ち込まれた時に用いられるようになった名称である。この語源は、米国の先住民アルゴンキン族が“pessemin”⁽⁸⁾と称していた柿の仲間で、米国東部および南部を原産としており、ニホンガキと同様に数少ない温帯地域に生育するカキノキである。17 世紀初頭に、先住民が生で、あるいは干し果実として冬に食べたり、木材にも利用したりしているのを英国の船乗りはすでに紹介している。日本の柿がヨーロッパに紹介される以前に、英国には類似の果実が紹介されていたことになる。南北戦争の時には、種子が軍服のボタンに利用されていたと伝えられており、米国住民の間でアメリカガキは日常生活ですでに活用されていた。ニホンガキ(主に蜂屋)が米国南部やカリフォルニアに導入されたのが、1870 年とされるから、すでに類似の果樹パーシモンが米国には存在していたことになる⁽⁹⁾。この時、ブラジル同様に大西洋を渡って米国にたどり着いたのか、それとも太平洋を渡って日本から直接米国に導入されたのかははっきりしない。しかし、ブラジルへの伝播ルートとその時期を考えると、ブラジル同様にフランスから米国の大西洋岸の南部地域にまず伝えられたと考えられる⁽¹⁰⁾。結果的には、伝播先にすでに類似の果物が存在したことから、南欧のように日本語の「カキ」は用いられずに、米国では「日本のパーシモン (Japanese Persimmon)」として認識されるようになった。米国のパーシモンが紹介された英国ではツンベルグの名を付した学名から“kaki”という音は利用されなかった。つまり、物の伝播の形態のなかで、「物」と「言葉」が一緒には伝わらなかった例である。米国では、アメリカガキを用いてパーシモンパイ、パーシモンプディング、パーシモンキャンディなど、加工して食されてきたことから、導入された日本の柿も同様に様々に利用され、「柿」のレシピは豊富である。とはいえ、ブラジルのように柿栽培が輸出に繋がるまでに展開することはなかった。

おわりに

日本の柿は、17～18 世紀に「カキ」⁽¹¹⁾という名称とともにヨーロッパに伝えられ新しい果

実として紹介されると同時に、温暖な地域は柿の栽培地にもなった。19世紀には大西洋を渡り、南米に「kaki」という音とともに伝えられ、20世紀にブラジルで日本移民が導入した甘柿と出会った結果、従来の「kaki」の概念が変化した。ブラジルに渡った「kaki」と同時期に大西洋を渡った可能性がある北アメリカの「kaki」は、土着の類似の果実パーシモンがすでに存在していたために、南欧諸国やブラジルのように日本語の「カキ」の音が利用されることはなかった。「kaki」は「Japanese Persimmon」と紹介され、Persimmonの一種と認識された。日本の柿の消費が拡大するにともない、「柿」は単に“persimmon”と表現されるようになってきた。日本から旧大陸を経て新大陸に伝播していった「柿」の歴史とともに、多様な形態でヒトとモノが出会い、出会ったその先々で新たな文化を創り出してきた。移動するヒトやモノが代わっても、移動に伴う新しい文化の創造は今でも続いており、これが人類の歴史なのでもある。

(元上智大学教授・上智大学イベロアメリカ研究所名誉所員)

[註]

- (1) *Dicionário Houaiss*, Rio de Janeiro: OBJETIVO, 1a.ed., 2001
- (2) 今井敬潤『柿の民俗誌一柿と柿渋』初芝文庫、平成2年(初版)。
- (3) 甘柿は13世紀に突然変異によって出現した日本固有の種とされている。中国でも甘柿の存在は確認されているが、日本の甘柿とは異品種のものと判断されている。
- (4) 日本移民80年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会、1991年、289頁。
- (5) オランダ商館に出入りするわずかの日本人が「コーヒー(kaffie)」という新しい飲料を口にした様子が記されている。以来、「珈琲」「可否」などと記されながら、日本で「コーヒー」として国民的飲料になるには200年の時間を要した。
- (6) 日本の柿の木の学名として *Diospyros Kaki* Linn.f. とも記されることがあるが、この学名が、小リンネ(Carl von Linneden yngreあるいはCarlus Linnaeus filiusとも記される)から名づけられたのが1781年であることが明らかになり、今日ではThunbergの名を付けた学名を用いることが妥当であろうとされている(杉浦明、宇都宮直樹、片岡郁雄、他編『果実の事典』朝倉書店、2008年、174頁参照)。
- (7) 1978年のブラジルの柿に関する記述の中でも、甘柿より渋柿が普及していると報告している(橋本梧郎『ブラジルの果実』農林省熱帯農業研究センター編、1978年、547頁)。
- (8) 先住民の言葉をアルファベット表記したもの。干し果物の意。
- (9) 『ケンブリッジ世界食物史大百科事典5』三輪叡太郎監訳、朝倉書店、2005年37頁。
- (10) 2008年に出版された杉浦、宇都宮、片岡その他[編]による『果実の事典』(朝倉書店、179頁)に掲載されている「推定されるカキの起源地とその伝播経路」によれば、大西洋と太平洋の両者を渡ったように記されている。伝播の時期の相違を想定して2つのルートが示されていると思われる。
- (11) 日本語の「カキ」は、漢字が伝播する前から使用されていたとする説がある。漢字が伝来すると、「賀岐」「加岐」などが充てられたが、最終的には中国名の「柿子」から「柿」とした。弥生時代の遺跡からは木材として杭に利用されていたことが発見されている。飛鳥時代末の遺跡からは現在の栽培柿と同じ種が発見されている。

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (68)

新井 正一郎

Central Park (セントラル・パーク) 1811年頃のニューヨークは、作家ヘンリー・ジェームズ(1843～1916)が『ワシントン広場』(1881)のなかで「バッテリー公園あたりに集まり、むこうには太平洋が見渡せた」と描いているように、こぢんまりとしていたが、発展性を秘めた都市であった。1825年エリー運河が開通するとニューヨークは運河輸送により商業の主導権をフィラデルフィアから奪い、その経済力を増していった。ほどよい密度をもっていたマンハッタンの人口は、1820年から1850年までの間に4倍にふくれ上がった。多くの個人住宅が新築されたが、急速な人口増加には追いつけなかった。この著しい発展に魅せられ、1820年頃からニューヨークにつめかけてきたヨーロッパからの移民を、民主主義詩人ウォルト・ホイットマン(1819～1892)はわくわくした思いで、「あらゆる種族がここ(ニューヨーク)におり、世界の全ての国々がここに寄進する」と歌い、ニューヨーク、つまりマンハッタンが民主主義都市の手本になるだろうと予測した。しかし自らが見たいと願ったそうした夢は、ほどなく、ニューヨークが深刻な経済危機に見舞われたことや、1830年頃から生じた都会人を自負する白人ニューヨーカーと様々な移民集団あるいは農村から移ってきた移住者との間の文化的・思想的対立が続いたことで、現実のものにならなかった。

19世紀の半ば頃まで、50万近くになったニューヨークの住民たちは、金持ちも貧しい移民も「ピロー・ザ・ライン」(below the line)と呼ばれたマンハッタン14丁目以南の工場、倉庫、下宿が立ち並び密集した窮屈な地域で暮らしていたので、当時ニューヨーク市長であったド・ウイット・クリントン(1769～1829)はマンハッタンを将来人口が100万近くになっても住民が気持ちよく暮らせる大きな都市に創り変えようとした。1820年、彼は委員会で検討した測量士ジョン・ランデル作成の都市開発プランを発表した。まもなく金持ち連中や中産階級の人々はスラム化していた旧シティを脱して、14丁目以北の碁盤目状の新しい都市マンハッタンのステータスの高い地区へ移っていった。ところが1840年代になると、この新シティも母国の飢饉にみまわれたアイルランド移民や動乱を逃れてきたヨーロッパ移民で溢れ、息苦しい圧迫感を呈していた。移民の子も街路以外に遊ぶ所がなかった。エリート集団はこのような環境に不安を感じ、公費による都市の広い緑のオアシス(公園)建設に心を向けるようになった。周知のように、19世紀中頃のアメリカの市は、まだ公園用地を抛出する義務はなかったため、前記都市計画委員会が1811年に出したマンハッタン開発のマスタープランには、公園の敷地は一つもなかった。マンハッタンに息苦しさを解消する場として緑の公園を造るよう求めた最初の人々は『ニューヨーク・イヴニング・ポスト』の編集長ウィリアム・ブライアントだ。彼は1844年の同紙に次のような記事を書いた。「この島の海岸は商業によって徐々に食い荒らされている。健康とリクレーションのために島をまもろうとするなら、今がその時期だ」。心身の安らぎを提供してくれる緑の広がる都会のオアシスを求める声は、ホイットマンと同時代のニューヨーク生まれの作家ハーマン・メルヴィル(1819～1891)の『白鯨』(1851)という作品にも現れていた。「夢みる安息日の午後、この町を巡航してみたまえ、(略)無言の歩哨が部署につき、ぐるりと町を囲むように、何千また何千という、(略)人間が立っているだろう。(略)これはどうしたんだい？われら自然のパラダイス、緑の野は失われたというのかい」(坂下昇訳)。これとは対照的に、自然豊かな公園建設案を社会的愚行として痛烈に非難する人々もいた。主に経済界のリーダーや宅地開発業者たちだった。例えば『ジャーナル・オブ・コマース』の編集者は次

のように述べる。「島の半分を怠け者の便宜のために永久の森に変える必要はない。壮大な公園計画はいかさまである。中止は早ければ早いほどよい」。

1857年、市民の公園を求める声が期待以上に広がっていたことが分かったので、市当局はマンハッタンの再開発のため、セントラル・パークという広大な自然公園建設に力を注いだ。1857年秋、市はマンハッタン島中央の34.5平方キロの長方形の土地を500万ドルで買収すると、そこに住んでいた1万6,000人のドイツ人、アイルランド人、黒人に立ち退き命令をだした。そして2週間後、市長はセントラル・パークの設計を、公募で選ばれた造園技師フレデリック・ロー・オルムステッド（1822～1903）とカルヴォート・ヴォクス（ダウニングの弟子）に依頼した。これは「民主主義を木々や土壌に訳」した空間だと、ヴォクスが口癖のように言っていたように、彼の一大関心事は自由と民主主義であった。彼は公共の広場を都市の肺としてだけでなく、多様な市民が階層、民族に関係なく楽しく交友できる場にしたかった。1858年春、ヴォクス自身の哲学の実現に動員された職人の総数は、ドイツ人の庭師、イタリア人の石工、大工、かじやを中心に約3,000人であった。彼等は泥をさらい、勾配を直し、道をつけ、沢山の苗木を植え、岩があちこちに露出している荒廃した大地を改良した。1860年までにほぼ完成したこの大事業は、確かに豊かな白人達にとっては憩いの場であった。来園者は入り口から公園の奥に向かう起伏に富んだ心地よい散歩道をゆっくり進むと、突如視界が開け、アメリカの豊かな自然の光景をずっと楽しむことができた。しかし、それはヴォクスとオルムステッドの根本的な思考とは違い、多様な人間の集う場とならなかった。というのは、豊かな白人は別として、ダウントアウンの貧しい人々が利用するには遠すぎた（乗合馬車で一時間要した）からであった。加えてオルムステッドは、公園内にいろいろな規制、例えば野球、グループのピクニックなどの遊びや芝生内の立ち入りを禁止する標識を設けたり、暴漢の脅威や騒動を防ぐため警備員を雇ったりしたので、子供は遊びにくかった。そんなわけで、できあがったセントラル・パークは、住人同士のつながりの場であるどころか、むしろ、多くのニューヨーク市民には関心のないものになってしまった。

そうしたなか「民主主義は外気と親しみ結ぶ」ことが肝心の信念を持つ前記ウォルト・ホイットマンには、この公園は散歩し、馬車で回り、公園警備員と会話をせずには、一日たりと過ごせぬところであった。その気持は『自選日記』（1882）に表れている。「1859年春、私は殆ど毎日セントラル・パークを訪れ、坐り、散歩し、馬車でまわっている。今月はこの場所すべてが最高の装いを示している。もえでる若葉でいっぱいの木々、花咲きにおう灌木の沢山の白とピンク、まだタンポポの黄色い色が点在する、いたるところに広がる草のエメラルドグリーン—何マイルも露出しているこの地特有の多くの灰色の岩—頭上の美しい、清らかな夏空。（略）午後早く、静かに坐っていると、警官のきちんとした身なりの砂色の顔の若い男がやってきて、私のそばに立つ。我々は仲良くなり、雑談する」。このような大量の移民の流入、産業化などは、当時のアメリカの大都市にスラム街という新しい貧困を生み出す原因になっていた。1842年に合衆国を訪れたイギリスの作家チャールズ・ディケンズ（1812～1870）は帰国後に著した『アメリカ紀行』（1842）の中で、すでに悪名高かったニューヨークのスラム街、つまりバワリー街に面した悲惨な、むさ苦しい区域ファイブポイントの貧しい家を2人の警官に伴われて、観察した時のことを次のように記している。寝込んでいた家人はびっくりして目をさまし、這い出してくるが「それはまるで最後の審判の時が近づき、すべての忌まわしい墓がその死体を吐き出しているかのよう」（伊藤弘之他訳）だった。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会定例研究会・発表要旨】

Latin Music and American Popular Music in the Post-War Era

Kato David Hopkins

Americans have been influenced by Latin rhythms and musical styles since the beginnings of the record industry. In the jazz age of the 1920s, there was a tango boom. Swing bands of the 1930s often used elements from Latin dance music. There was nothing like a consistently popular Latin music until after World War II.

The war years had made many changes in the pop music industry in the U.S. From 1942, the musicians union, American Federation of Musicians, began a strike against the major record companies. Record companies had traditionally treated recording sessions as one live performance. Musicians were paid for their performance but were not entitled to any part of the profits of the record made from the performance. The immediate effect of the strike was hardly noticeable. According to union rules, singers, that is, performers who only sang and did not perform on musical instruments, were not musicians and thus not eligible to join the union. Singers could freely make contracts with record companies, and record companies could hire students or other non-professional musicians for backing at recording sessions. Frank Sinatra, for example, continued to put out record throughout the war years.

The military draft, rationing of gasoline, and restrictions on travel made the previously standard practice of extensive touring by big bands problematic. This had been the main source of musicians' income. Now they were stuck in the big cities. There was work on radio and playing live, but not like before. Most

of the big bands did not survive. Musicians who did not enter the military led a new trend toward small unit jazz. This trend had begun before the war, but this new version of jazz, essentially "modern jazz" became the dominant version, at least for critics and passionate fans. Performed in nightclubs more than dancehalls, audiences paid more attention to the music.

After-hours jam sessions by these musicians led to development of the challenging art jazz known as bebop, championed by Charlie Parker, Dizzy Gillespie and others. This was not music for dancing and as a consequence, "real" jazz began to lose its popularity.

In the ensuing gap, a new style of pop music, R&B, appeared. R&B, in its original incarnation, was a small unit that played a blues-based music, with influence from gospel styles often present. This music was strongly identified with urban African American culture.

During the war years African American culture changed radically. Eleanor Roosevelt, a forceful advocate for civil rights, had lobbied for an anti-discrimination clause in defense contracts. This meant that companies that wanted to make new contracts with the government for war-related business had to prove that they did not discriminate on the basis of race in hiring. Many occupations that had previously been closed to African Americans became available. Money began to pour into black communities. This led to new opportunities for musicians like the R&B players. Some of the money went to the first black-owned and operated radio stations, where this music, previously invisible to mainstream audiences, could now be heard by anyone. Independent record companies, who were willing to make favorable contracts with union musicians, be-

gan to sprout up.

With the end of the war and government policies favoring returning veterans for housing and school loans, the great migration of white Americans to the suburbs began. Part of suburban life was, of course, access to automobiles. Teenagers in the white suburbs began to listen to black radio, to the horror of their parents.

While there was no strong, enduring support for Latin music, it proved useful to the record industry as a reaction against new trends and as an attempt to return music culture to pre-war, big band ways of doing business.

Bebop's Dizzy Gillespie was encouraged to try and combine modern jazz and big band music and he chose to do so by emphasizing Cuban rhythms. In the late thirties, he had been a roommate of Mario Bauza, an important multi-instrumentalist and arranger with Cab Calloway's big band. Using musicians recommended by Bauza, such as Machito and Chano Pozo, Gillespie began creating a musical style called Afro-Cuban that was roughly equal parts of Latin dance music and progressive jazz.

Gillespie's big band was not a great success, but it proved influential to other bands trying to revive big band culture. Most bands jumped on to a rumba and mambo bandwagon and in the late forties, Latin dance rhythms dominated adult pop music.

The teenagers, however, had slipped away. Record companies (and parents, probably) tried to entice them away from black music (R&B) by making mambo into a youth music. This was not successful. Dance music for adults was shifting to the new LP format, while young people preferred to buy cheaper 45rpm single records.

With the arrival of Elvis Presley in the

early 1950s, the battle against R&B was lost forever, as the rebranding (whitening) of R&B as Rock 'n' Roll made it acceptable for record companies (and parents, probably). Even so, the record industry continued to try and use Latin dance beats and trends as a way to avoid overtly sounding too black. Songs like Dean Martin's "Cha Cha Cha d'Amour" or Elvis Presley's "Bossa Nova Baby" are just two examples.

In general, Americans have little knowledge of or interest in Latin America, but when Latin American culture can be used for perceived profit (whether financial or cultural) they have no hesitation about appropriating it.

(天理大学国際学部准教授)

リオデジャネイロのサンバ=レゲエ：

スラム街の文化活動 NGO、Grupo Cultural Afro-Reggae の事例

北森 絵里

この報告は、リオデジャネイロ（以下、リオとする）のヴィガリオ・ジェラル（Vigário Geral）というファヴェーラ（スラム街）における、サンバ=レゲエをベースとした音楽およびパフォーマンスと、それを核とするアフロレゲエ文化活動 NGO を紹介し、ファヴェーラという場を生きる住民（特に、若者）を取り巻く「現実」にとって、その活動と音楽パフォーマンスが持つ意味を考察した。

アフロレゲエとは、サンバ=レゲエという音楽スタイルを変容させた表現パフォーマンスである。サンバ=レゲエは、1970年代、アフリカ系人口が約6割を占める都市サルヴァドールで創造された音楽であり、黒人運動と密接に関わる活動でもある。1960年代から1970年代に大西洋圏で展開されたネグリチュードおよびパン・アフリカニズムがブラジルにも波及し、サルヴァドールのアフリカ系の人びとがそれを受け入れ、カーニバル音楽と社会運動・文化活動を一体化させるこ

とによってサンバ=レゲエを生み出した。そして、このサンバ=レゲエを、リオのヴィガリオ・ジェラルのミュージシャンが受容し土着化したのがアフロレゲエである。また、アフロレゲエには、黒人の復権や反人種主義だけではなく、ファヴェーラの貧困、低所得、失業、暴力を告発し、そのような「現実」を変えるという活動も含まれる。

ヴィガリオ・ジェラルのアフロレゲエ文化活動 NGO の結成には、1990 年代初頭のブラジルの状況が深く関わっている。当時は、ブラジルが新自由主義的国家へと舵を切ったところであり、1980 年代後半から徐々にリオ中のファヴェーラに勢力を浸透させていた犯罪組織と、政府・警察との対立が激化した時期でもあった。このころから、ファヴェーラにおいて、麻薬犯罪組織掃討のための警察特殊部隊と犯罪組織との間の銃撃戦を伴う暴力が継続し、無関係な大多数の住民は精神的に疲弊してきた。同時期、ファヴェーラは新自由主義的な変化から取り残され、人びとの生活は好転しないままであった。そこで、ヴィガリオ・ジェラルの若者は、自ら行動を起こし「現実」を変えるのだという強い目的意識をもってグループを結成した。

グループの主な活動は次の通りである。(1) コミュニティ内での音楽活動およびプロのミュージシャンの育成、(2) コミュニティの外部や国外での音楽活動、(3) コミュニティの若者や子どもを対象とした職業訓練やスポーツ教室、(4) コミュニティ内の雇用の創出、(5) コミュニティに対する誇りと帰属意識を高めるための活動、(6) 警察官とのワークショップによる住民と警察官の相互理解など。

アフロレゲエ・グループの文化活動には、娯楽として音楽・パフォーマンスを楽しむという以上の政治的な意味がある。外部エリート層は、「ファヴェーラ」地域に対して差別意識と偏見を持っている。それは、「暴力と犯罪がはびこる、失業者と低所得者の住む場所だ」という偏見である。しかも、このような偏見はコミュニティの若者や子

どもにも内在化されている。それゆえに、コミュニティ内外において、偏見を払拭し「ファヴェーラの」ではなく「コミュニティの」「現実」をそこに住む人びとの視点から「正しく」表現するのが活動の主目的の一つである。さらに、グループの活動には、コミュニティの若者に対して、「現実」や生活・人生を変えようという意識を持たせ能動的に行動させる意味がある。そのために、複数のコミュニティの複数の活動グループと連帯し、外部の政治家・知識人・企業・メディアを巻き込む活動を行っている。それは、外部エリート層に依存するということではない。また、外部エリート層と対立するということでもない。それは、外部エリート層を利用し、具体的な実利実益をコミュニティにもたらすというやり方である。

このような政治的態度を含む活動を、音楽およびパフォーマンスを中心にして推進することには、さらに大きな意味があると考えられる。第一に、サンバ=レゲエは、1990 年代初頭、ヴィガリオ・ジェラルの若者にとって「新しい」音楽だった。なぜなら、それは既存の音楽（サンバ）ではなかったからだ。約 100 年前に創造されたサンバは、リオのファヴェーラの代名詞のような音楽であり、かつ官製ナショナリズムの音楽表現でもある。したがって、サンバ=レゲエという音楽を選ぶということは、ステレオタイプと既存の体制を否定するということでもある。第二に、アフロレゲエのサウンドは、多数のバスドラム、ドラムスおよびコンガからなる大編成のパーカッションが演奏するサンバ=レゲエのリズムとグループが中心となっている。そのリズムはかなり高速である。その高速リズムにラップ（ボーカル）が乗る。ラップは日常会話の声質や発声と同様の語り口調である。これらがひとかたまりとなったサウンドを聴く者は、リズムに身をゆだね身体をうねらせるように踊る。さらにそこに、サウンドに乗ったアクロバティックなダンスと腰をくねるように動かすアフロダンスを披露するダンサーが加わる。パフォーマ

ンスを見る者は、そのダンスにさらに刺激され身体の動きを加速させる。パフォーマンスが進むにつれて、演奏する側と見る者が一体となり相互に気持ちが解放されていく。ここには、同じ場を共有する一体感と共存性が生まれる。

このようなサウンドとパフォーマンスの力があってこそ、先に見た活動がコミュニティの若者によって共有される。外部エリート層は、情報や

知識としてこの場を理解することは可能であるが、コミュニティの人びとの日常性や美意識と一体化してそれらを共有することは難しい。その意味において、アフロレゲエの音楽とパフォーマンスは、コミュニティの表現文化が外部エリート層によって回収され無力化されることを阻止する力を持つと考えられよう。

(天理大学国際学部教授)

天理大学アメリカス学会 第22回年次大会シンポジウム

テーマ：ブラジルのなかのアフリカ

◆開催日：2017年12月2日(土)

◆会場：天理大学ふるさと会館ホール

【開催趣旨】

「ブラジルとは何か」という問いに、「アフリカ文化」を語らずして返答するのは難しい。食文化、音楽、スポーツ、宗教という人々の日常実践の基層にはアフリカ文化の痕跡が深く刻み込まれているからである。ブラジルはアメリカス地域で最も多くの黒人奴隷をアフリカから受け入れた。16世紀、サトウキビ栽培のために黒人奴隷制がスペイン領エスパニョーラ島（現在のハイチおよびドミニカ共和国）に導入されて以降、大西洋を舞台に総数1千万を超える人々が商品として運ばれた。ブラジルにはそのうち40%近くの奴隷が輸送されたとみられ、1800年頃のブラジルでは総人口325万人中190万人がアフリカ系だったとされる。

ブラジルには、「家父長主義的プランテーション」の温情主義的な奴隷主の下で人種差別のない混血民族の国を生んだとする、「人種デモクラシー」というナショナリズムの産物が存在する。ジウベルト・フレイレの『大邸宅と奴隷小屋』（1933年）で示されたこの言説は、現在も「ブラジルに人種差別は存在しない」という極めて楽観的な語り口に確認することができる。しかし、貧困層にアフリカ系の割合が高いという現実はその言説が虚構に過ぎないことを如実に物語っている。

奴隷として抑圧された人々の過去は、慈悲深い支配者層というイメージのもとで、さらに人種的寛容への信仰の強化によってカモフラージュされているようである。米国では、黒人は南部において事実上公民権を剥奪され、北部でも隔離主義的に扱われた

がゆえに、差別撤廃にむけた被抑圧者の戦いが展開した。一方、ブラジルの黒人は奴隷制度が廃止された後は、制度的な抑圧に晒されることはなく、逆に、時代を経てからもアフターマティブアクションのような待遇を受けることもほとんどなかった。それゆえ、語られない人種差別が、存在しないはずのものとして亡霊のように徘徊している。

西洋近代の植民地主義がもたらした以上のような被抑圧的状况において、黒人は自分たちのアイデンティティを守りながら、異種混濁的で様々なアフロブラジリアン文化を創造してきた。それは、「近代に対抗する文化」（古谷）である。しかも、彼らは「アイデンティティ＝文化＝地域（領土）＝歴史」という結びつき（「近代的帰属の源泉」）を否定された人々である。

一方、今日の液状化したグローバル社会では、ジェンダー、移動する人々とその文化、国民国家からの独立運動にみられるように、「近代的帰属の源泉」のありようが新たに問われるようになっている。とすれば、黒人によって生きられた文化や黒人のありようは、近代という時代がもたらした周回遅れのトップランナーとして、グローバル社会を考える際の導きの糸を与えてくれるように思える。

本シンポジウムでは、温情主義や人種的寛容といった修辞法によってカモフラージュされながらも、抑圧の歴史を強く生きてきたアフリカ系の人々の文化を無批判に賛美することなく検討し、西洋近代の巨大な実験場の一つといえる「ブラジル」とは何かを考えると同時に、我々が生きる「今」を再考する手がかりにしたい。

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる 12 月 2 日（土）13 時から天理大学ふるさと会館ホールにおいて、「第 2 2 回年次大会」（テーマ：ブラジルのなかのアフリカ）を開催します。大会当日、学会誌『アメリカス研究』第 22 号を会員のみなさまに配布させていただく予定です。お楽しみにご来場ください。大会プログラムは次のとおりです。

＜総会＞ 12：30～

＜基調講演＞ 13：00～14：00

古谷嘉章氏（九州大学大学院教授）

＜パネルディスカッション＞ 14：15～15：35

1. ニウタ・ジラス氏（上智大学助教）
2. 北森絵里氏（天理大学教授）
3. 久保原信司氏（愛知県立大学兼任講師）
4. 青木 敬氏（京都外国語大学嘱託研究員）

＜総合ディスカッション＞ 15：45～16：25

＜懇親会＞ 17：00～19：30

会場：天理大学レオック

内容：カポエイラの実演、シュハスコ（ブラジル風焼肉）

協力：天理教海外部ラテンアメリカ課

参加費：5,000 円（事前に参加申し込みが必要です。ただし、天理大学生は別料金です。大会事務局で確認してください。いずれも、連絡先は m-yamada@sta.tenri-u.ac.jp です。）

◇基調講演をしてくださる古谷嘉章先生は、アフロブラジリアン宗教研究においてのみならず、物質性の人類学を構想するなど日本の人類学を牽引される著名な研究者です。東京大学に提出された博士論文は、『憑依と語り—アフロアマゾン宗教の憑依文化—』（九州大学出版）として上梓され、今回のシンポジウムに大いなる知見を与えてくださるものと思います。

パネルディスカッションでご登壇いただくニウタ・ジラス先生は、日系ブラジル人児童の教育問題がご専門ですが、今回のテーマに引きつけた食に関する議論を展開していただきます。リオデジャネイロの貧困層を長らく研究されてきた本学の北森絵里先生には音楽と政治性につ

いて語っていただきます。ブラジルの格闘技や護身術ともいわれるカポエイラを日本で広めておられる久保原信司先生には、学術的考察はもとよりご自身の活動についてもお話いただきます。青木敬先生はアフリカのカポ・ヴェルデ研究者です。今回のシンポジウムの議論を別の角度から相対化してくださることと思います。

以上、実りある議論が期待されます。懇親会も含めて多数のご参集をお待ちしています。大学の HP もご覧ください。

編集後記

◇今号の巻頭言はブラジル研究者として名高い三田千代子先生にご執筆いただきました。移民研究がご専門だけに、物と言葉の移動（伝播と伝来）についてもご関心を払われるのでしょうか。あるべき研究者のお姿として敬服いたします。内容は研究者としてのみならず、生活者としての視点で書かれており読みやすく興味深いです。議論はアメリカス地域全体を射程に入れられており、本学会の趣旨をご配慮いただいたものと感謝いたします。秋の夜長、しばし柿を頬張りながらグローバルなカキの流通史というアカデミックな世界にも思いを馳せたいものです。

☆新入会員：

福山 孝（2017 年 7 月入会）

中西 光一（2017 年 7 月入会）

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000 円です（入会金はありません）。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 77：2017 年 10 月 25 日発行)

発行者：木下民生

〒632-8510 天理市杣之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/